

(英語版)

(アラビア語版)

令和四年六月

SF小説…「新・ナクバの東」(二十一)

第一部…「イスラエル、イラン核施設を空爆す」

二十一 さまよう三羽の小鳥(中)

「マファイア」は饒舌であった。先の見えない不安感を忘れるために彼はひたすら喋りまくった。生まれ故郷ウクライナの農村での貧しかった時代。ソビエト連邦の崩壊をきっかけに新天地を求めてイスラエルに移住した一家。移住先で与えられた荒野の開拓地での父母の奮闘。一族の期待を背に空軍に入隊し優秀なパイロットとして頭角を現した事。今回任務を完遂したことで無事帰還すれば名誉の勲章と昇格が待ち受けているに違いないこと等々……

マファイアは「無事帰還すれば……」と言うと急に黙りこくってしまった。

「アブダラー」は二人とは対照的に終始寡黙であった。イラン領空を脱した直後から体に不調を感じ始めていたのである。二週間ばかり前、高熱を出し入院していた姪を見舞いに姉の嫁ぎ先近くの病院を訪れた。その後彼自身も微熱を出したが、辛い寝込むほどのことはなかった。ただそのことは仲間に伏せていた。もし体の不調を訴えればメンバーからはずさされたに違いない。彼は三人のパイロットの一人に選ばれた栄誉を失いたくなかった。

アラブのミズラフイム出身である「アブダラー」は「エリート」のようなアシケナジム出身者たちとは陰に陽に差別されてきた。そのため彼の友人の中には過激組織ハマスに身を投じる者も少なくなかったが、彼自身はイスラエル国民として生きる道を選んだ。「人は国家を選べない以上、国家とともに生きる。」それが彼の信念であった。そして軍隊に志願し忠実に義務を果たした結果、今回国家的使命を帯びたパイロットに選ばれた。そのため何としても今回の任務をやり遂げたかったのである。

彼はまだ独身である。両親は既に亡くなっている。彼の身内は姉とその娘のルルの三人だけである。それだけに彼と姉との結



びつきは強い。そして姪のルルは彼によくなっていた。

そんなルルが数週間前に高熱を出し、「叔父ちゃん！叔父ちゃん！」とうわ言を言っていると姉が伝えてきた。彼はその週末に急いで病院に駆け付けた。幸いにも熱は引いており、ベッドに起き上がった姪に彼は絵本を読み聞かせてやった。姪は彼の腕を抱え込みうれしそうに聞き入っていた。付き添いの姉が「ルル！そんなにくっ付きちゃ叔父さんに風邪が移っちゃうよ。」と注意したが彼女は抱え込んだ腕を離そうとしなかった。

(続く)

本件に関するコメント、ご意見をお聞かせください。

荒葉一也

[Arehakazu1@gmail.com](mailto:Arehakazu1@gmail.com)